連載

市長室からこんにちは

vol.71

益田市長
山本 浩章

１９６４年の東京オリンピックは、戦後の復興から高度経済成長に移行していた日本にとって、先進国への仲間入りを世界に告げる好機とされました。２０２０年東京オリンピック・パラリンピックを2年後に控えた今、先の五輪がもたらした変化とインパクトを振り返ります。

最大の変化は都内の公共交通網の発達といえます。開催の2年前から供用が始まった首都高速道路は羽田空港から都心を経て本会場や選手村に至る区間が最優先で整備されました。地下鉄網も新規路線の相次ぐ開通で急速に充実しました。空港と浜松町を結ぶ東京モノレールの開業は五輪開会の23日前でした。

さらに言えば、開会9日前に運転を開始し東京―名古屋―大阪の三大都市圏をつないだ東海道新幹線は、世界初の高速鉄道でした。難題だった高速走行時の振動の抑制は、かつて世界最強の戦闘機とされた零戦の技術転用の賜物とされています。

東京五輪で初めて公式計時を担った国産時計メーカーは、従来の機械式に比べ格段に正確なクオーツ式を世界に先駆けて採用し、大会を通じて計時エラーゼロという快挙を達成しました。競技記録の集計も、それまではまとめてデータ入力するバッチ処理で行われ、確定に数箇月を要していました。ところが、画期的なリアルタイム処理システムが構築されたことで、国別メダル獲得数なども即座に表示されるようになったほか、競技最終日の閉会式では早くも公式記録本が完成していました。

海外への衛星生中継が初めて実施される一方、国内ではテレビが一気に普及しました。まだ大半が白黒テレビながら、五輪開催決定の１９５９年に24％だった世帯普及率が5年後の開催年には88％に跳ね上がりました。お茶の間で家族そろって競技を観戦したいという大衆の願望を映すかのような急伸ぶりです。

このように、東京五輪は多くの社会資本整備、技術革新、モノの普及を伴いました。そして、その影響は生活文化にも幅広く及びました。このことについては紙数の関係により次号にて述べることとします。

益田市の歴史文化の特色（全7回）

第3回　海から仰ぎ見る巨大古墳群

【問い合わせ先】市文化財課　☎31-0623

弥生時代以降、稲作が広まり、人々が定住するようになると、まとまった集団が形成されるようになり、そしてその指導者が豪族となっていきます。益田平野には有力な勢力がいたようで、乙吉・下本郷から鎌手あたりまでの連続した台地上に、彼らの首長の墓と考えられる古墳が残っています。

その中でも古いものが四塚山古墳群（下本郷町）で、団地造成時に、前期古墳（4世紀）を象徴する三角縁神獣鏡が発見されました。続く4世紀後半築造の大元古墳群（県史跡・遠田町）は、1号墳が全長86ｍの前方後円墳で、現時点では石見地方最大の古墳です。

国の史跡となっている5世紀築造のスクモ塚古墳（久城町）は、古墳時代中期を代表する大型古墳です。造り出し付円墳（直径57ｍ）とする説と前方後円墳（全長１００ｍ）とする説がありますが、いずれにしても県内でも屈指の大きさを誇ります。

6世紀築造の小丸山古墳（市史跡・乙吉町）は全長52ｍの前方後円墳で、周囲に溝と外堤を備えた石見地方唯一の形態をしています。

6～7世紀には鵜の鼻に相次いで古墳が造られ、かつて50基以上の小円墳（直径10ｍ以下）がありましたが、現在でも約30基の古墳が残っています（鵜の鼻古墳群〈県史跡・遠田町〉）。

これらの古墳はいずれも海が見えるところに造られています。また大元1号墳は海側の地山斜面を利用して造られ、海側の古墳側面の葺き石をより丁寧に積んでおり、海から見て大きく、立派に見えるように造られているという特徴があります。

このことは、これらの古墳が日本海を意識して、あるいは日本海から見られることを意識して造られたことを示しており、これらの古墳を造った勢力が、日本海との関わりが深かった可能性を示しています。

史跡　スクモ塚古墳（写真は島根県埋蔵文化財調査センター提供）